

少しずつ「おうち利用」軌道に…

利用募集をはじめてから7月で、一年が過ぎました。この春から、福島のお母さんたちから2件の「利用したい」コールがありました。8月にも一家族が「おうち利用」の予約をしてくれています。

会員のみなさんによる「空き期間利用」も3件ありました。「カラッポのおうち」でひとときを過ごすことによって、会の活動を実感。利用カンパもたくさんしていただきました。一步ずつですが活動は軌道にのりはじめたようです。福島からの利用申し込み3件は、福島現地で相談活動を活発に行っている「受け入れ全国」「ほよ～ん相談会」の案内で知っての応募でした。被災現地団体のがんばりが支えになっています。

夏草が勢いをまして、管理の仕事も手を抜けません。でも、畑のソバやコスモスもぐんぐん伸び、長瀬は夏の花がいっぱい。子どもたちを待っています。秩父長瀬のすばらしい夏を、ぜひ「カラッポのおうち」で！ 私たちも、被災現地に向けて「待ってます」コールをさらに大きく発信しましょう。

この夏、会員の方から「カラッポの会」を参考に「戸建て・家族単位」保養支援を始めたとのニュースがありました。一年の経験をいかし、支援と利用の距離がちぢまるよう、いっしょに力を出しあっていきたいと思います。※現在もっとも大きな保養施設で知られる「沖縄・球美の里」（約50人収容）の利用状況報告。夏・冬休み期間は応募／受け入れ倍率二倍、それ以外は定員を下回る。「保養の意味と認識、施設の存在について、いっそうの広報強化がもとめられる」とのコメントが付けられている（『未来の福島子ども基金ニュースレター』などによる）。



「母親サロン」に参加しました

6月19日、事務局・運営委員は被災現地福島で、子育てに奮闘するお母さんたちの集まり「母親サロン」を訪ねました。保養や避難についてのお母さんたちの「生の声」をしっかりと聞いてきました。子どもたちにも直接会うことができました。胸が熱くなりました。

サロンの司会 NPO「いのちの水」坪井先生がお母さんたちに「避難を困難にしている原因の第一番は何でしょう？」「経済的理由、という方、手をあげてみてください」と質問。あがった手は一人、二人……。 「では、仕事の都合？」…さきほど手をあげたお母さんを含めて、ほとんどのお母さんが挙手。「学校が原因？」…ちらほらとあがる手。

「子どもの避難のためなら貯金を全部使ってもいい…でも、子どもはその先ずっと生きていかなければならない。だから使ってしまうわけにはいかない……」。ある大臣が「最後は金目でしょ」と口を滑らせたそうですが、その言葉が、追いつめられたお母さんたちの悩みから、いかに遠い言葉わかりました。

子育てする「場所」は、安全に住む家と、お父さん、お母さんが働き続けられる「仕事」と、二つがひとつでなければいけない。子どもの健康、人間関係、両方とも傷つけ続けている「最悪の環境」から一瞬でも離れ、なかよく「明日」を語り合える場所「カラッポのおうち」がそんな場所になれば！ ……あらためて、そう思いました。



仮設住宅「お米が足りない」ってどういうこと？

川内村からの避難者220人が住む「仮設」を訪問しました（「母親サロン」訪問のあと）。事務局・運営委員はいただいたお米60キロ（横浜市農家、大谷さんからのご寄付）を届けました。

仮設から「お米が足りない」とSOSを発信している志田篤さん（避難お年寄り支援NPO「昭和横丁」を運営）にお話を聞きました。原発事故汚染で川内村民は避難しましたが、現在は「避難区域解除」によって「自主避難者扱い」。賠償や行政支援はうち切られました。若い働き手は、子どもを連れ仕事をもとめてはなれ、月数万円の年金収入などしかないお年寄りが仮設にとり残されています。



村へ帰ればお金の行政支援がでる。しかし、病院など閉鎖、お年寄りが暮らす最低のインフラが崩壊。村には、働き手がいなくなってしまったのです。戻ろうにも「戻れない村」…それが被災した村の姿です。事故以前、買ったことがない新鮮なお米や野菜を支援物資に頼るほかなくなっています。村でベテランの働き手だったお年寄りは、家族といっしょに農作業をしていました。しかし、原発事故で、家族から、仕事と自然の恵みから、引きはがされて孤立しています。静かな住宅から「助けて！」の聲がわきあがって感じられました。

★大人の気持ち

事故三年後の福島をたずねて支援ボランティアはますます大事と強い思いを強めた。お母さんたちとの直接のお話しが心にしみただけではない▼会員に福島訪問に行くお知らせと横浜市水道局会員有志のみなさんから、あつという間にたくさんペットボトル水、災害用水缶がそして、農家からおコメが……。車は前輪が浮き上がって見えるほど積載ぎりぎり満杯▼現地では「いのちの水」「いのちのおコメ」を、願いが、会員からは「私たちは見捨てません！」の善意のメッセージが集まる。これをつなぐのが事務局の仕事▼「福島の仮設は30年撤去できない」と志田さん（現地お年寄り支援NPO代表）は予測。「お年寄りが亡くなるまで続く」という意味▼阪神大震災では仮設住宅閉鎖まで5年。原発事故は、これをはるかに越える深い傷をこの社会に負わせた。「30年」はセシウムの半減期と同じ▼「カラッポのおうち」利用提供から7月でまる一年。利用申し込みがなかったときは考え込んだことも……。子どもたちのために！「おうち」の草取りをしながら「この場所をまもろう」ともう一度誓う。

夏のカンパのお願い

向暑の候、会員ならびに支援の皆さまのご協力に、感謝申し上げます。

おかげさまで福島からお子さんと家族が「おうち」を利用し始めました。お母さんたちは、まちがいなく保養や避難をのぞんでいきます。しかし、小さなお子さんをまもりながら出かけるお母さん、お父さんのご苦労もまた大きく、サポートが欠かせません。現地訪問、送り出し団体との連絡・連携等、実務費用が必要です。消費税の引き上げなど、皆さまの負担が大きくなっている折りに、まことに恐縮ですが「カラッポのおうち」へのカンパ・ご寄付をお願い申し上げます。

また、お母さんたちは「ペットボトル水」など安心な水を、仮設のお年寄りは「おコメ」「乾麺」など主食材の提供をもとめています。草取りや掃除「できること」の提供を歓迎いたします。みなさんの善意を「カラッポのおうち」へお寄せください。

なお、今回同封いたしました振込用紙で年会費振込みも受付いたします。会計の都合上、できるだけ総会前（10～11月予定）に振込んでいただければ幸いです。

長瀬やなせ「カラッポのおうち」の会・事務局 ◆連絡電話（FAXも） 045-933-1792（管理人 杉村長世）

◆郵便振込口座 00250-9-136022 カラッポの会 ◆ゆう貯口座 10210-3511241 杉村葉子

◆e-mail karapponouti@gmail.com ◆ホームページ検索は「カラッポのおうち」で検索

※ 管理人への連絡はできるだけメールか郵便（226-0021 横浜市緑区北八朔町1842-4）にてお願いします。